補遺　伝承と継承者

初代乾山、尾形深省の没後、乾山焼の後継者は京都と江戸に分派する。

代々継承者の問題は、江戸入谷村における陶法書「初代乾山口述二代筆記」写本（「内竈秘書」）の発見もあり、明確になった事柄もあるが、照合すべき作品、文書、資料の類いも乏しく、多くのことに疑問が残る。

初代乾山の江戸下向に伴い、京都では養子猪八（伊八郎）が二代を継承。猪八は仁清焼二代清右衛門子、乾山の二条丁子屋町移転に伴い養子となるが、京都東山聖護院御門境に、やきもの商売、乾山焼の製作に携わる。初代自筆陶法書『陶磁製方』（鐵竹堂瀧澤記念館）には以下のようにある。

又ハ私新意ヲも相交　愚子猪八ニ傳　唯今ハ京鴨川ノ東
聖護院宮様御門境ニて　本焼内焼共相勤罷有候（傍線筆者）

一方、乾山の養子、尾形家の人物となったことは、光琳庶子寿市郎（小西彦右衛門）養子先、小西家旧蔵「小西家文書」に以下のように認められる。

①　午歳五十一歳（寛延三年）、従弟尾形伊八郎（「小西彦右衛門方淑親類覚書」）

②　右深省之子ニ尾形伊八郎と申人有之　是も焼物細工いたし被居候由　二代目乾山ト云　是も鳴滝村ニ住居か不相分（「小西方守筆尾形家由緒覚書」）

作品に関しては「延享歳製」「延享年製」とした火入ほかが現存。延享年間は乾山没して（寛保三年・一七四三）数年後のことである。彦右衛門親類覚書は寛延三年（一七五〇）の記録であり、猪八、彦右衛門は同時代に生きた人物と推考するが、猪八の没年は宝暦（一七五一―六四）頃ではなかったか。

乾山焼模倣、有田焼が盛行、粟田口窯では金彩・青・緑色を基調とした古清水様式が確立する。文人趣味、煎茶道が流行し、町売りなどの進歩もあり、京都のやきものは産業陶器として全国へと展開する時期に入る。粟田口、清水、五条坂の諸窯が活躍、同業者町が形成され、仲間組織も結成されるが、伝統的な個人経営と推測される猪八窯は、製作、販売、いずれにしても困難な事態に直面したのではなかろうか。京焼の概略は、

六―七世紀頃：山科・岩倉における須恵器　瓦生産
八―一五世紀：須恵器ほか栗栖野窯の施釉陶器（尾張陶工の伝習）
中国陶磁器の輸入と珍重　律令体制の変化

一六世紀：深草・嵯峨・幡枝（嵯峨土器集団の移住）の土器製作
一七世紀：茶の湯の盛行　中国系内窯陶技押小路焼　楽焼
：尾張の陶工・本窯陶技　写しもの　さびて面白き
粟田口焼・清水焼・五条坂諸窯など　唐物屋
同中期：新しき京焼上絵付技法　東山山麓から西山御室へ
色絵の源流仁清焼　御菩薩池焼など　伊達に見事
一八世紀：桃山時代以来の京焼陶技陶法の伝承、集約
新機軸尾形乾山による乾山焼　分業製作　町売り
同後期：産業として全国に展開　同業者町　組合組織

など、猪八時代頃には以上の経緯を辿ったものと考える。

乾山焼も、初代創意の画讃様式、古物の模写から、衆人の需める琳派様式が主体となる。が、流行は一〇年である。光琳人気、意匠・装飾などにも翳りが生じ、猪八作品にもその影響を考えるが、かつて茶の湯者、趣味者、人の嗜好に随い生産された京焼は、特産物、食膳器など宝暦以後には商品としての需要が増加。生産量は拡大し、供給体制の整備、伴う品質の低下も生ずるなど、京焼諸窯全体に厳しい現実が訪れる。

猪八門人には清吾の名が残る（『陶器密法書』）。清吾以外の弟子、模倣者「乾峯」銘の作品もあるが、猪八子孫の記録は乏しく、以後の乾山焼継承者は曖昧となり、猪八窯は閉窯する。

が、江戸に「尾形家系図」が伝承する。

皮細工師尾形圭助（白圭・一八三七―一九一一）の養子六世乾山浦野繁吉（一八五一―一九二三）によれば（「尾形乾山其家系に就て」）、同家には乾山子孫を伝える系図が伝世、南多摩郡忠生村大字図師村曹洞宗円福寺には過去帳が残るという。が、年代的、子孫の存在もあるなど、同乾山は初代深省とは考え難く、二代猪八ではないかと推考するが、同人には二人の男子が認められる。

尾形乾山　長男重兵衛ハ紀州公ノ臣坂田氏ノ養子トナル故ニ二男新七家名相続ス

二代新七　京都寺町三條本能寺前ニ住シ後年江戸へ下リ赤坂黒鍬谷ニ住ス　本然浄皖居士　明和六丑年十月没ス

三代専左衛門　江戸赤坂黒鍬谷ニ生レ安永八年武州多摩郡図師村ハ妻ノ実家ナル故ヲ以テ同村ニ住シ農ニ帰ス爾来代々茲ニ居住ス（略）

長男重兵衛は紀州藩家臣坂田氏の養子。家名は次男新七が相続するが、京都寺町本能寺前に住まいし、後年江戸へ下るとある。江戸では赤坂黒鍬谷に住すとあり、明和六年（一七六九）没するが、図師村へは安永八年（一七七九）三代専左衛門の代に移転、農に帰すという。本能寺は本応寺、信長時代は四条西洞院、明智光秀の変後、秀吉によって現在の寺町御池へと移されたが、同所は初代乾山の丁子屋町、二代猪八の聖護院工房に近接する。

『すみだ川花やしき』（佐原菊塢著・一八二〇）には以下のような記述がある。「伊八子伊八東都エ下リ武家ニ仕　陶器ヲ製スルハ二代目伊八迄ナリ」。（『古画備考』（一八五一）には「伊八東都へ下リ武家ニ仕へ」とあるが、伝承の誤認か）

伊八の子伊八は江戸へ下向、武家に仕え、陶器を製することは二代目伊八迄とある。先の尾形家系図を照合、武家に仕えた伊八の子伊八とは、江戸出府後赤坂黒鍬谷に住まいした猪八の二男新七とは考えられないか。黒鍬とは戦国時代に始まる軍の普請、雑役などを勤めた人夫である。江戸期には江戸城内の警備・防火・運搬・清掃などに携わるが、黒鍬組を組織、赤坂黒鍬谷に住したという。仮定であるが、新七は父猪八の窯業を継承、が、何らかの理由によって京都を離れ黒鍬組の一員となり、江戸に没する。

やがて五〇年が経過。京都に三代乾山を名のる人物が現れる。五〇年の歳月は何を意味するのであろう。誂品の利便や広告、宣伝などを纏めた『商人買物独案内』（一八三一年刊）には以下のようにある。

乾山　尾形氏名ハ真省　光琳之弟也　洛西鳴滝村一陶器作ル　自ラ陶隠ト号　世ニ乾山焼ト称シテ清玩トス　又其後洛東聖護院村ニ住居シ當時　柳馬場通竹屋町上ル　宮田弥兵衛ト改名ス　又二条富小路東へ入町ニ出店ス　御焼物師　三代目乾山尚古斎（印）陶隠子

鳴滝村における初代の作陶、聖護院への移転のこと、只今は柳馬場通

竹屋町上ル、名を宮田弥兵衛と改名、二条富小路東入ルに店舗を構えるという。柳馬場竹屋町、二条富小路はともに初代乾山の二条通丁子屋町工房の近在である。乾山焼の創始を述べ、「三代目乾山尚古斎（印）陶隠子」と記すが、乾山焼の正統、伝統の継承を表示、出廻る乾山焼、他の製作者、同業者を牽制する態度を示す。が、改名の必要はいずれにあったのか。すべては想定の域を出ないが、猪八の子孫と仮定すれば宮田家への養子入り、婿入り。また清吾など門人との関わり。が、全く異なる情況も考えられ、弥兵衛を粟田口焼陶工と推考することは如何であろうか。三条粟田口窯から独立、工房を設け、工人をおき、自らも作陶、店舗を構えて販売の責任を負う。

作品には「文化年制三代乾山宮田彌兵衛之造・文化年製・文政年製・天保年製・乾山・乾山爾・三代乾山・三代目乾山尚古斎造・以初代乾山三代乾山造」など。箱書には「三代尚古斎（印）乾山」とある。

楽焼、磁器製品もあるが、草花図、唐草文様、阿蘭陀様式などの色絵陶器が主体であり、器種は雑多、造り慣れた成形技術、刻印のないことに特色がある。商業的な作陶態度は企画化・様式化した装飾、定型化・単一化した銘の書方にも表れるが、製作期間は安永から天保時代（一七七二―一八四四）へと長期に渉り、栃木県佐野大川家には、三代乾山の佐野来遊を知らせる菊図手焙二点（鐵竹堂瀧澤記念館）が伝世した。同手焙箱書には安永乙巳（未）春三月とある。一作には「三代乾山」、他の一作には「以古乾山珉山造之」とあり（左頁図参照）、形状・装飾・陶法を同じくする。

珉山は平賀源内の弟子、高橋道八風の陶器を製し、安永九年（一七八〇）志度において開窯するとある（『日本陶器目録』）。乾山焼模倣には色絵土器皿、発掘品に小さな錆絵竹図茶碗もあるが（下図参照）、初代高橋道八にも色絵竜田川図向付などが伝世。道八は粟田口焼陶工であり、文化八年（一八一一）二代道八時代に五条坂へ移転をする。三条粟田口焼窯場は仁清をはじめ、乾山焼鳴滝時代の内窯担当孫兵衛は三条蹴上、比丘尼坂に住し（『陶工必用』。『京都御役所向大概覚書』には「孫」「彌」の誤認があり、三条南禅寺領東小物座町とある）、借窯時代の乾山、猪八も深い関わりを有していた。粟田口では乾山焼の創始、丁子屋町移転のこと、作品様式、陶法などを充分承知。

宮田弥兵衛は「三代目乾山尚古斎」を名のり、陶技・陶法を初代道八、珉山とは同じくする。弥兵衛は粟田口焼陶工ではなかったろうか。

が、ここに弥兵衛の文言（『商人買物独案内』）を宜とする人物が現れる。「受業三世蔵六堂呉介」である。

が、同じ京都に同じ時代、二人の三代乾山は疑問である。作品には「乾山・三代乾山・乾山呉・陶隠乾山呉介造・日本乾山呉介製・於海雲山中製之」など。箱書には「受業三世乾山・三世蔵六堂乾山呉（六角書印）・三代乾山（印）呉介・大雅堂寓・為始祖百年忌追福以鳴瀧士造之　天保壬寅仲秋」ほか、猪八作松竹梅図茶碗箱書（円照寺）には「二代伊八作・受業三世乾山（印）呉介　證」とある。天保壬寅は同一二年（一八四二）である。猪八とは時代的な隔たりもあり、両者に直接の関係は認められない。が、猪八工房に関係した陶工との所縁は如何であろうか。

『陶器密法書』（猪八陶法書）には「薬三条竈にても五条竈にても細工人方にて薬かけ　焼代遣候事」とある。

三条、五条の窯場では、乾山時代は素焼、貸窯をする。猪八時代は成形・施釉・焼成などの助成も行うが、素人陶芸の進出、活動などが推考

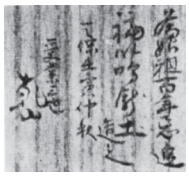
珉山　錆絵竹図茶碗
京都公家町遺蹟出土

猪八作茶碗・呉介箱書

（右図）猪八作藍絵松竹梅図茶碗箱書
（左図）呉介作染付鳥図菱香合箱書

両箱書はともに三代蔵六堂呉介による証である。ともに受業三世乾山と書すが、何故受業とし、三世を名のったのか、手懸かりはなく、猪八との直接的な関係も認められない。

香合箱書には初代一〇〇年忌に際し乾山初開窯鳴滝の土を以って作陶するとある。模倣を超えた作意、意気込みが窺われる。



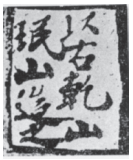
呉介作香合・呉介箱書

―二代乾山猪八―

猪八　藍絵松竹梅図茶碗・銘

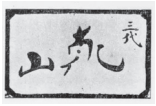
―珉山―

珉山　色絵菊図手焙・銘



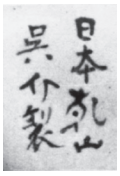
―三代乾山宮田弥兵衛―

三代弥兵衛　色絵菊図手焙・銘

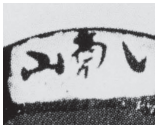


―三代乾山蔵六堂呉介―

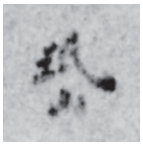
三代呉介　染付鳥図菱香合・銘



猪八　錆絵染付土器皿・銘



珉山　色絵草花図土器皿・銘



三代弥兵衛　色絵百合図土器皿・銘

三代呉介　色絵草花図土器皿・銘

される。呉介の作品は土器・陶器・磁器などと幅が広い。皿・碗・水指・香合など、色絵、染付、南蛮手もあり、中国渡来の陶製の匙「散蓮華」の模作も残る。「陶隠乾山呉介」「大雅堂寓」とも書し、初代乾山一〇〇年忌には鳴滝山中の土を用いて香合を製作するなどの箱書を認めるが、陶工、否、茶の湯者、趣味者の類いではなかったか。時には既製素地を応用、施釉、焼成を依頼するなど、専門陶工との関わりを考えるが、陶工に非ざる者として角倉為次郎他乾山弥兵衛・乾山五郎兵衛などの名が残る（『工芸志料』）。

初代没後、乾山焼は京都と江戸に分派した。

二代は京都に猪八、江戸に次郎兵衛、三代は三者がおり、京都に既述の宮田弥兵衛、蔵六堂呉介、江戸入谷村に宮崎富之助の名が伝えられる。現存する乾山銘の総体は、さらに京都における土産物類の製作者、後世の模倣者、継承者らの作品などを含むが、富之助銘はそれら現存作品中に一点も見当たらない。二代次郎兵衛同様、低火度焼成・色絵作品、晩年の乾山作陶に繋がりをもつと考えるが、多くの伝世する乾山銘作品に紛れていると推測する。

入谷窯は瓦・土器を製する窯場であった。

安永から文政期（一七七二―一八三〇）には、幕府御用土器師として松井新左衛門（『大名武鑑』『新

編武蔵風土記稿』）、日光御門主職人に仁右衛門（『新編武蔵風土記稿』）の名が残る。土器師屋敷は、のちにやきもの屋敷と称された旧入谷三五、六、七番地辺りと推測するが、乾山の下向した享保中期、下谷、坂本では火鉢・瓦燈（がとう）・燈籠などを製していた（『続江戸砂子温故名跡志』）。松井家など御用窯とは別の窯場が浮上するが、平成一二、三年、入谷村下谷二丁目1、2番地では発掘調査が行われた。結果、同所は下谷坂本東運寺墓地に重なり、入谷村日光御門主屋敷近辺、民窯のあったことを確認。一九世紀前半の地層から皿・土瓶・鍋・徳利・灯明具などが出土した。「入久」「いりや」など彫字のある陶片、多様な鉛釉土器、変形皿には乾山焼色絵鮑貝形皿に類似の白化粧、色絵具を発見。御用窯に加え、民窯の存在が明らかとなる。民窯となれば自由な作陶が可能である。享保頃には火鉢・土風炉・燈籠などの製作、乾山の下向に伴って乾山焼が加わるが、元文二年（一七三七）佐野における庭焼では、同地の素封家大川顕道は入谷村久作方に筒型茶碗・火入・皿類などの素焼素地を誂（あつら）えている（『陶器傳書』）。白粉・内窯などの注文もあり、乾山時代の入谷村は、

一つに御用窯における瓦・土器生産

二つに民窯における日常雑器の製作

三つに乾山の下向に伴って新たに「みやこ」の陶芸、茶道具製作などの道が開かれる。

余波はやがて他所へと波及するが、文京区東京大学構内遺跡、大塚窪町遺跡などからは土器、磁器、施釉陶器に交じり、白化粧、色絵具の施された陶片が出土した。江戸の乾山焼は低火度焼成を主体とした。『陶工必用』（大和文華館）によれば、関東における作陶上の工夫、他窯の素地や素材の応用、絵画活動の影響もあり色絵具への関心が窺われる。「内竈秘書」を照合すれば、釉上白・黒上絵具、色絵具は赤・萌黄・紺・紫・黄・鼠色・桃色・カボチャ色などであったが、陶工らの作陶は不明。乾山自作の茶碗・皿・短冊皿には、書・画を用いた画讃様式、和歌・物語などの文学的意匠、定家十躰の和歌など、京都時代の足跡が残る。

明和三年（一七六六）、宮崎富之助は二代次郎兵衛から陶法書、初代口述二代筆記「内竈秘書」を譲られた。三代継承は抱一箱書、「乾山世代書」、『古画備考』に認められるが、同書には二ヵ所に渉り以下の奥書がある。

①　明和三丙戌年七月廿四日　近藤安治郎写之　是ハ又傳之也

②　干時宝暦十年七月　乾山省古　（別紙添付）

写者近藤安治郎に関しては不明であるが、宝暦一〇年（一七六〇）は初代没後一七年、「乾山省古」とあり、

所望之仁有之候共　作傳堅可為無用者也（しょもうのじんこれありそうろうとも　でんとなすことかたくむようとなすべきものなり）

伝と為（な）すこと無用也という。乾山焼陶法の拡散、模倣作品の広がりに結びつくが、後世の陶法書には錦手（にしきで）絵具の智慧を融合、「乾山雪・雪白」など、別して白絵具（化粧土）への関心が顕著となる。三代となれば富之助にも作陶はあったであろう。が、作品は確認できず、富之助子鉄（てつ）は植木屋手伝いとあり（『古画備考』）、やきもの製作に関与したか否かは不明である。

五七年が経過。天保七年（一八三六）吉原の名主西村藐庵（みゃくあん）は江戸の代々「乾山世代書」（善養寺）を認（したた）める。同書は三浦乾也へと伝承するが、

一　初代乾山紫翠深省　右者准后宮様京師より御召連被成候

一　弟子二代目乾山次郎兵衛　入谷出生之人

一　弟子三代目宮崎富之助　同入谷村

一　四代目　雨華庵　抱一上人

一　五代目　歌仙庵藐庵宗先　金龍山中住居

とある。「内竈秘書」は文政六年（一八二三）酒井抱一（ほういつ）が入手。抱一は光

一九世紀　江戸遺跡からの出土品　文京区大塚窪町遺跡など

文京区大塚窪町遺跡の出土品

文京区大塚窪町遺跡は、寛政五年（一七九三）、江戸、旗本三〇〇〇石大久保家の拝領した屋敷跡である。

一九世紀の遺構からは磁器製品に加え、上図土器・陶器、白化粧に色絵を交えた陶片が出土した。焙烙・壷・植木鉢など生活道具に交じり「ひいな遊び」「ままごと遊び」などの玩具もみつかり、子弟らが年中行事を学び、礼儀作法を身につけるなどの目的に用いられたと伝承する。当時、磁器製品は肥前が中心、陶器は瀬戸・美濃・信楽・京都などから搬入されていた。江戸では武家屋敷、富裕町人らの庭焼もあり、一九世紀頃からは趣味的風趣を具える作陶が増加。専門陶工に加え、趣味者、下級武士らの内職、副業なども推考されている。

白化粧と色絵具は乾山焼の特色である。直接の関わりは不明であるが、後世の乾山焼関係陶法書はそれらの記述が多くを占め、初代乾山没後数十年、作陶者らが意識する、否に関わらず、乾山焼陶法の活かされていることが確認される。遊戯性を帯び、数寄者的風趣を具えることにも特色があり、技の美などは二の次とする趣きがある。

琳顕彰に尽力した絵師であるが、大澤永之（号紫翠）宛書状によれば、乾山命日（六月二日）翌日、入谷村陶工多三郎が抱一宅へ枇杷（びわ）を届ける。枇杷は「乾山弟子中」命日に供える供物であった。入谷窯の存続が分明、乾山弟子中とあることから多三郎など陶工らの存在も推測されるが、すでに時代はやきものでも欲すれば難なく入手可能な時世を迎えていた。扱い易い磁器が盛行、個人の作陶を尊重する風潮も生じており、果たして入谷窯にどれほどの需要があったものか。入谷窯は消息を絶つが、乾山焼の陶技陶法は以下の人々を経由、各々に拡がりをみせる。

（一）初代乾山の陶法

「内竈秘書」を通じ次郎兵衛・宮崎富之助・酒井抱一・西村藐庵・三浦乾也・井伊直弼（なおすけ）・浦野繁吉・バーナード・リーチなど。『陶工必用』を通じ進藤周防守（すおうのかみ）勝任・矢田部豊前守（ぶぜんのかみ）（推定）・水上蘆川（みなかみろせん）など

（二）二代猪八の陶法

『陶器密法書』を通じ沼波弄山（ぬなみろうざん）・浅茅堂三阿至玄（あさじどうさんあしげん）・佐原菊塢（きくう）・針生乾馬（はりゅうけんば）・根岸武香など

以上、初代深省、二代猪八の陶法はともに江戸において拡散する。初代乾山の模倣は趣味者の風趣、猪八様式は商品として、京都では土産物の趣きなどが残るものと考える。

—訂正事項—

「初代乾山口述二代筆記」写本（「内竈秘書」）の発見もあり、これまで三代乾山宮崎富之助とした作品は（『尾形乾山—全作品とその系譜（四巻）』『乾山焼入門』他）、京都三代宮田弥兵衛の作陶、作品の誤りであった。富之助の作陶は確認できず、謹みここに訂正をいたします。